

知りたい。日本の文



● 着物

着付けの先生に聞くと昔はもっと自由にラクに着物を着ていたそうなのです。体を締め付けず、着物の布をうまく体に巻き付けるような感じです。そう聞くと「作り帯」や、洋服感覚の着付けでファッショントレンドの着物もいいなと思います。

さて、日本の着物は足し算、引き算とよく言われます。例えば、足し算の代表は「紋(もん)」です。紋を増やすことで格を上げます。買った値段に関係なく、着物の種類と紋の数で格が決まっていくのです。

第一礼装 打掛、黒留袖、本振袖、喪服など 5つ紋
準礼装 色留袖、訪問着、付け下げ、振袖 1つ紋、3つ紋

※例えば袖(つむぎ)は価格的に高級ですが格としては街着という考え方です。

引き算の例としては留袖があります。娘時代に着ていた振袖を結婚後に袖を留めれば(袖を短く切れば) 留袖になるという訳です。

そういう訳で、昔は着物としての役目を終えると、布団に仕立て直されたり、座布団になったりと、最後までモノの命を全うし、始末の心がありましたね。

★ 置む文化、折る文化

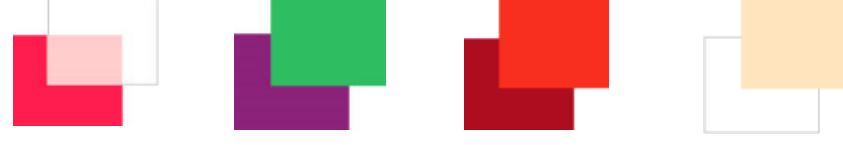
着物は置んで収納します。寝具(ふとん)やちゃぶ台(小さな机)も置むもの。折る文化といえば、折り紙や贈答で使う熨斗(のし)紙もそうですね。身のまわりには日本独特の置む、折る文化が沢山あります。

★ 色かさね

置む、折る以外に、着物の格にも通じる「重ねる文化」があります。重ねることで格をあげる、平安時代の「十二単(じゅうにひとえ)」がそうです。

昔むかし、貴人が十二単を着ていた平安時代のころ、色のセンス、とくに「色かさね」のセンスは最も重要なポイントでした。このセンスがないことは大きな致命傷でもあったといわれます。(下記はその一例です。)

春のかさね 桜 夏のかさね 葵 秋のかさね 紅葉 冬のかさね 氷重



色を重ねることで、季節を表現しているのですが、現代の季節のイメージとは少し異なるかもしれませんね。今より圧倒的にモノも情報もなかった時代に想像力と感性を駆使して作られた「色かさね」です。

昔の色は、その呼び名も繊細で名付けた人の五感のすばらしさを感じます。下記は自然の草花などをイメージに作られた色の名前です。

木賊 とくさ 瑠璃 るり 檜皮 ひわだ

朽葉 くちば 萌黄 もえぎ 蘇芳 すおう 等